敦賀半島 ふるさと紀行

木ノ芽古道

木ノ芽峠を越えて敦賀と今庄（南越前町）を結ぶ道は、古代から中世にかけての重要な道でした。その後も近代になるまで多くの人や荷、文化が行きかった「木ノ芽古道」を訪ねました。

言奈地蔵から峠に向かう

■今庄～敦賀の最短路

嶺南と嶺北を結ぶ古代の北陸官道は、当初、敦賀から東浦の海岸沿いの五幡などを経由。山中峠を越えて今庄に達するルートをとっていました。

その後、平安初期の天長7年（830）に木ノ芽峠（628m）越えの道が上毛野陸奥公（かみけのむつきみ）によって開かれたと言います。木ノ芽峠越えは山中峠より高く険しい道でしたが、敦賀から今庄へ抜ける最短路として選ばれたと見られています。

さらに信長時代の天正6年（1578）、柴田勝家が今庄から直接近江に抜ける栃ノ木峠越え（北国街道）を改修。以後、このルートが北陸道の幹線となりましたが、木ノ芽峠越えも利用されていました。

■木ノ芽古道を敦賀に下る

敦賀の新保のバス停から木ノ芽峠までは約2・6kmの登りですが、峠には今庄側から今庄365スキー場内の道を登っても行くことができます。登り詰めると言奈地（いうな）蔵の直下の駐車場に至ります。今回は言奈地蔵からスタートし、峠を敦賀側に下ってみました。

御膳水

道元禅師の碑

峠から暫くは急坂が続く

■道元禅師の別れ

地蔵の前から平坦な道を進むと峠に至り、石畳と茅ぶきの家が見えてきます。その向かいには道元禅師の碑が建っています。

永平寺を開山した禅師が建長5年（1253）、病いを得て京に帰るため永平寺を出発。この峠で送ってきた弟子と別れました。

その折、この峠で「草の葉に首（かど）途（で）せる身の木部山（きのめやま）　雲に道ある心地こそすれ」の歌を詠みました。禅師は京到着後間もなく54歳で没しました。

■古戦場―信長も

木ノ芽峠一帯は、敦賀から府中（越前市）へ抜ける北陸道の関門で、古くから戦略上重要視されてきました。山頂付近の峠を挟んだ屋根筋に城跡群が今も残ります。天正3年（1575）には、信長軍が10万余の軍勢で越前入り、木ノ芽峠で戦い越前の一向一揆を平定しています。

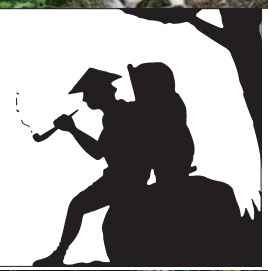
■つづら折りの急坂

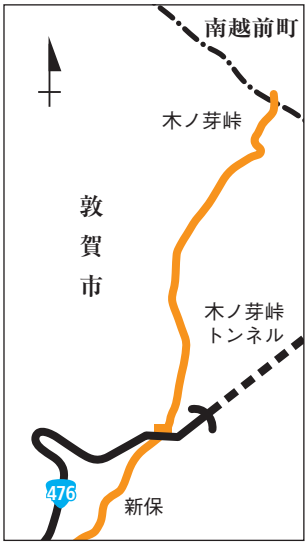
明治11年、明治天皇は北陸巡幸の折、この峠を越えて敦賀入りされました。峠を下ってすぐに「明治天皇御膳水」の碑が立つ水場があります。

ここから暫くは谷あいの急な下り、つづら折りが続きます。道幅は一人が通れるほど。時折沢水の流れを越えたり、細い川筋に並行するところも。下流では木ノ芽川となっているようです。

■休み石

坂が少し緩くなったところで、腰かけるのに具合の良さそうな石がいくつか並んでいました。説明板には「休み石（腰掛け石）」とあります。かつて多くの荷が人の背に負われ運ばれましたが、荷を背負ったまま腰を掛けて休めるようにと置かれた石とのことです。


休み石（腰掛け石）㊤と説明板の図㊧



■峠越えに難渋した紫式部

そこから少し下ると平安時代の紫式部の詠んだ歌を書いた説明板が立っています。

式部は越前国司となった父に従い、京から今の越前市に下りましたが、長徳3年（997）、越前から京へ帰る際に、この峠で詠んだ詞書（ことばがき）と歌を記しています。

都の方へとて帰る山越えけるに、よび坂といふなる所の、いとわりなきかけぢに輿（こし）もかきわづらふをおそろしと思ふに猿の木の葉の中よりいと多く出で来たれば

（次ページへ）

紫式部の歌の説明板

猿もなほ遠方人の声かはせ
　われ越しわぶる たこの呼坂

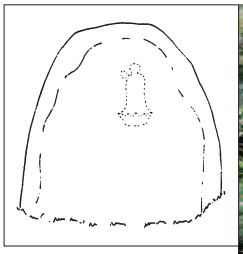
■弘法の爪描き地蔵

下りも中間辺りで爪描き地蔵に出会えます。目印の説明板付近で道なりに左折して下らず、山肌に沿って右手に回り込むと谷川があり、対岸に大きな岩があります。

説明板によれば若越八十八ヶ所第十二番の札所で「木ノ芽中坂地蔵尊」と称し、「苔むした岩の上の方に、高さ七〇センチほどの、蓮台に乗った地蔵菩薩立像が、腰から上は薄肉彫りで、下は線彫りで描かれています」とのこと。

作者や年代は不詳ですが、弘法の爪描き地蔵さんと呼ばれているとも記され、次の卸詠歌を紹介しています。

春雨や木の芽中坂地蔵尊
　迷うわが身を引き上げてたべ



弘法の爪描き地蔵を刻む岩㊨と説明板にある図㊤

■六字名号岩―南無阿弥陀仏

そこからほんの少し下ると、円球を斜めに半分に切ったような形の大きな岩が道の右手に見えてきます。これが六字名号岩。道とは反対側（裏側）に文字が彫られているので見落とさないよう。

文字は六字名号の「南無阿弥陀仏」。その下に「天下太平」と読める字も。道を下りて、岩の背後に回って見ることになります。

▲六字名号の彫られた岩（岩の右側に文字がある）

岩に彫られた六字名号

■棚田の跡

道は、さらに勾配を緩くし、足も軽く感じます。次第に杉の木が目立ち始め、人の暮らしの匂いが感じられ始めます。杉木立の向こう、左手に石垣が垣間見えてきました。石垣は奥に向かって二段、三段とあり、棚田の跡だそうです。

棚田の跡

■蓮如上人は吉崎へ

やがて視界が大きく開け、国道476号に出ました。国道に面して車が何台か止まれるほどの空き地があり、絵地図入りの木ノ芽古道の説明板が立っています。近くには「親鸞聖人ハ越後ノ国国府へ　蓮如上人は越前ノ国吉崎へ」と刻んだ新しい碑があります。

毎年春、吉崎御坊（あわら市）での蓮如上人の御忌法要に向け、上人の肖像画「御影像」を輿に載せて、京都東本願寺から吉崎へ道中をしますが、御影像は木ノ芽峠の難所を越していくそうです。

親鸞聖人・蓮如上人の碑

■新保へ下って

木ノ芽峠からの道は、さらに新保の集落へと続くのですが、国道476号の整備で分断されました。現在は、この空き地から国道に面して右手にある階段を下りると国道をくぐる道があり、反対側に抜けることができます。先に進むと木ノ芽古道のもう一つの説明板が立っていました。

▲新保の集落近くに立つ説明板。国道をくぐると、ここへ出る

■水戸浪士の本陣―新保陣屋

新保には敦賀市文化財の新保陣屋（武田耕雲斎本陣跡）があります。この建物は、当時、問屋だった家の屋敷の一部で、規模は小さいが書院造。

水戸浪士ゆかりの新保陣屋

幕末、天狗党と呼ばれた武田耕雲斎ら水戸浪士の一行は、水戸からはるばる京を目指し、山越えを重ねて越前入り。八百余名が木ノ芽峠を越えて元治元年（1864）12月、新保に到着しましたが、ここで幕府軍に下り、後に敦賀の来迎寺野で大勢が処刑されています。

耕雲斎が陣を取ったのがこの本陣で、浪士らの降伏に際し幕府軍の先陣を務めた加賀藩の使者と会談を行ったのもこの書院でした。

発行所■日本原子力研究開発機構 敦賀事業本部＝〒914-8585 敦賀市木崎65号20番
☎0770（23）3021 ホームページhttp://www.jaea.go.jp（平成26年11月発行）